様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２３０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７４０８

研究課題名（和文）ボランティア活動を通した教員養成のあり方と「教育的公共性」の構築に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Role of Teacher Training and the construction of "Educational Public Nature" through the Teaching volunteer activities

研究代表者
石崎　達也（ISHIZAKI, TATSUYA）

東京福祉大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０６１２８１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、「教職ボランティア活動」を通した循環型教員養成モデルを構築することである。調査研究では、伊勢崎市（群馬県）と協定を結ぶ大学とが「互恵的連携」を目指す中で設立された教職ボランティアチューター制度を対象とし、教職ボランティア活動に参加した学生からデータを収集し、本活動の意義や学生の体験の深化のプロセスについて、ボランティア活動における認知発達の先行研究や「省察」概念をもとに検証した。その結果、多くの学生のうちに、「教えられる存在」から「教える存在」になるという自己認識が生成され、子どもたちと実践者集団としての教員との連携を模索する意識（＝教育的公共性への意識）の芽生えが見られた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to construct the circulable teacher-training model through the teaching volunteer activities. This research was the object of the teaching volunteer tutor system which established aim at locally “reciprocal relationship” between Isesaki-shi (Gunma Prefecture) and a Private University. And then, we collected data from students who participate in this activity, verified about the significant of this activity and the process of deepening of experience, based on the proceeding studies of the cognitive development in volunteer activities and the concept of “reflection.” As a result, it was observed the self-recognition which transform from “learner” to “teacher”, that the awareness of the groping consciousness (=“Educational Public Nature”) which tried to collaborate with children and teachers in the field of education among many students as research collaborator.

研究分野：教育学

キーワード：教師教育　教員養成　教育方法　ボランティア活動

１．研究開始当初の背景

本研究は、「キャリア教育」の観点から高等教育機関におけるボランティア活動支援が活発に行われるようになった今日、本研究代表者が実際の教育現場に身を置きながら「理論」と「実践」の乖離の問題について考察を深めてきた成果（石﨑達也 2006）を発展させ、教員養成機関における「体験的学習」としての「ボランティア活動」に着目し、学生の「学び」と地域の教育組織の「学び」双方の活性化について検討することを目的している。

大学におけるボランティア活動支援に関する先行研究としては、立命館大学におけるボランティア活動支援に関する諸研究（桜井政成他 2009）が挙げられる。その他、多くの大学において実践例が報告されているが、体験的に学ぶことが強調され、体験を通して学ぶ、さらには体験から何かを学ぼうとする態度を育てることに関する研究は新たな今日的課題として残されたままである。

近年、「理論」と「実践」の乖離という問題がさまざまな学問領域から注目されるようになった。しかし、教育現場では高等教育機関で学習した理論や知識を実際の教育現場で「応用すること」が当然のように求められる一方で、ただ単に「理論」を現場に持ち込むだけでは役に立たないということから「理論」が軽視され、「ギルド的経験主義」に傾倒している。

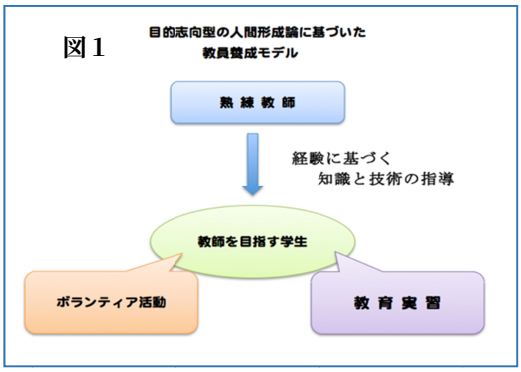
このような傾向に対して学校と教師を支援するために「理論」の応用としての「実践」という考え方とは異なる研究視座が求められている。

本研究代表者は、現象学からポストモダニズムへの過渡期の思想家 E.レヴィナス（1906-1995）の思想の影響を受け、「教育場面」そのものが教育の意味を生成する場であるという立場に立ち、「教育場面からの意味生成」の方法論的視座を模索してきた。さらに、彼の思想と教育との関係について、教育における「ケア」概念を提唱したノディングズ（Noddings, N. 2003）、ポストモダン思想の観点から近代主義的教育学を再考するスタンディッシュ（Standish, P. 1998）とイギリス教育哲学会の一連の研究業績（Egéa-Kuehne, D. 2008）、日本の教育哲学研究における「教育における〈他者〉解釈の研究」（丸山恭司 2001、小野文生 2002）を辿りながら、他者を〈受容〉する自己のあり方についての研究を進めてきている。

近年は、『他者を「理解する」とは、「他者との関係が理解をあふれ出てゆくこと」を理解することにほかならない』という E.レヴィナスの言説を手がかりに、生徒と教師の教育関係を捉え直す試みとして「教育関係において言語が演じる立場を描写する」活動に関する研究を行った。その結果、テクスト化を介して学校現場における教師の「体験」と生徒の「体験」を互いに交差させ、教師による生徒の語り得ない言葉を解釈する営みを通して、体験的学習における「教師」は、生徒にとっての未知なるものを体験する際、共に体験する実存的存在としての責任を担うことが明らかとなった。

さらに、これまでの研究成果は、ケアリング論（Noddings, N. 2003）の概念や関係発達論（鯨岡峻 1999）の理論的枠組みに依拠しつつ、「教えられる人であると同時に教える人でもある」という二重の体験が「教師になっていく」過程における自己変容をもたらす契機となる新たな教員養成のあり方を構築する可能性を秘めており、従来の目的志向型の「人間形成論モデル」（図１）では捉えることができない「教師になっていく」という「臨床的人間形成モデル」（図２）を提案できるのではないかと考えた。

図１



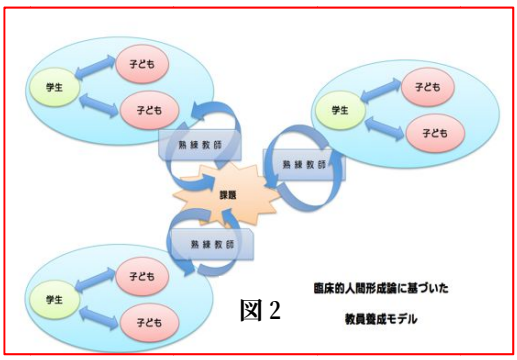


図２

２．研究の目的

本研究の目的は、学習支援ボランティア（勉強塾ボランティア）活動を通した循環型教員養成モデルを構築することである。第一に、地域の教育機関と教員養成機関との連携による学習支援ボランティア活動をフィールドとして設定し、ボランティアに参加する学生、受け入れ先の教員、児童生徒のそれぞれに質問紙法・エピソード記述等の手法を用いてデータを収集する。次に、「基礎研究」によって得られた従来の人間形成論とは異なる教育哲学・思想研究の理論的枠組みによって調査結果を分析・考察し、教師を目指す学生の「学び」の活性化と質的向上につながる方法論を構築するとともに、教員養成課程の外に「教育的公共性」を生成する仕組みとしてのボランティア活動の意義を明らかにすることを目指した。具体的に、下記の通り、

３つの目標も設定した。
（１）「教育場面」における「体験」のテクスト化がもたらす「自己変容」を明らかにする
個々の学生が「教師になっていく」過程において、ボランティア活動における「体験」の記述作業（＝体験のテクスト化）が、どのような／どのように「気づき」をもたらしたか。また、どのような／どのように「学び」へとつながったかを明らかにする。
（２）教員養成の過程における体験的活動の有効性を明らかにする
従来の教員養成システムは、近代主義的教育（学）が構築した人間形成論による目的志向型の経験主義に傾倒した結果、知識・技術の修得自体が教員養成そのものになったと言っても過言ではない。そのために知識・技術の習得を超えたところにある「体験」の意味は従来の枠組みでは捉えきれないものを含み込んでいると考えられる。そこで、「体験的活動」を通した教員養成のあり方の有効性を明らかにする。
（３）「教育場面」のテクスト化という方法論の有効性を明らかにする
「教育場面」に一定の枠組みを当てはめるのではなく、当事者の「声」を丁寧に聴き取り、読み解く作業を行う。具体的にはボランティア活動に参加している大学生の「体験」の記述をテクストとして見立て、「基礎研究」で練り上げた視点から再解釈を行うという方法を批判的に検討し、有効性と問題点を明らかにする。

３．研究の方法
本研究の目的を達成するために、精緻かつ発展的な研究を行うための３つの段階「基礎研究」「調査研究」「開発研究」を設定する。
（１）「基礎研究」－従来の「教員養成」のあり方を読み直す視座の構築
本研究代表者は E.レヴィナスの思想をとおして近代主義的教育（学）の思想や体制を原理的に問いなおす研究を続けてきている。レヴィナスの思想に関する諸外国のさまざまな研究動向を見ると、彼の思想自体が異文化理解のよりよい方向性、心理学的な観点からのよりよい対話関係、さらには生徒と教師のよりよいコミュニケーションのあり方を探求する上で、理性中心主義の観点とは異なる視点を与えてくれるものであることがわかる（Standish, P. 1992）。
また、本研究代表者はE.レヴィナスの言説を手がかりに、生徒と教師の教育関係を捉え直す試みとして「教育関係において言語が演じる立場を描写する」活動に関する臨床教育学研究を行ってきた（石﨑 2011-2012）。
以上のような研究成果をふまえ、本研究は近代主義的教育（学）が構築した人間形成論とは異なる現象学的・関係発達論的観点から「教員養成」のあり方について考察を深めていくために、従来の思考様式や教育理論の問い直しを含む、「基礎研究」としての「ケアリング理論」（Noddings, N. 2003）、「臨床教育学」（皇紀夫 2003）「教育人間学」（矢野智司 2000，田中毎実 2003）、「現象学的教育学」（中田基昭 2008）、「関係発達論」（鯨岡峻 1999）に関する文献研究を行った。
（２）「調査研究」においては、東京福祉大学（群馬県伊勢崎市／藤田伍一学長）と伊勢崎市教育委員会に研究協力を依頼し、「ボランティア参加学生」「教員」を対象とした質的調査研究を行った。
調査の第１段階では、ボランティア活動に参加する予定の大学生（約 100 名）を対象に研究の目的を明らかにした上で、記述式のアンケート調査およびインタヴュー調査を実施した。
第２段階では、ボランティア活動に参加している大学生（約 100 名）、派遣先の小中学校の教員（約 40 名）及びボランティアの大学生から学習支援を受けた児童生徒（約 10 名程度）に記述式のアンケート調査およびインタヴュー調査を実施した。
これらの調査結果に対してグラウンデッド・セオリー（木下康仁 1999）やボランティア活動の認知発達の理論、「省察」の概念の観点から分析を行った。
第３段階では調査結果の分析をもとに、研究者・研究協力者・小中学校教員が集まり勉強会を実施し、本ボランティア活動がもつ教員養成の意義と可能性を検討した。
（３）「開発研究」においては、本研究の発展的な展開として「ボランティア活動を通した実践者集団と教員養成機関との有機的な連携による循環型教員養成モデル」の構築とその提案を行った。
本研究期間中、ボランティアに参加した学生から収集したボランティア活動に関する「ポートフォリオ」（＝「ボランティア体験を分かちもつ記録」）をもとに、「ポートフォリオ」を採用することの有効性を検討した。
開発研究にあたっては、研究協力者、研究協力校の教員、さらには教員養成課程をもつ他研究機関の研究者と協働し、「勉強会」「研究会」を実施し、実践者集団（＝地域の学校）と教員養成機関（＝高等教育機関）との連携・協働を促進した。

４．研究成果
（１）「ボランティア・チューター制度」の意義について
研究協力者と、「ボランティア・チューター制度」に関する理解を深める過程で、この制度は、「子ども」の育ちを支える活動であり、教職を目指す大学生の、教師としての「育ち」を促す活動であるとともに、教師を育てる「教師」を育てる活動に展開していくことで、学校組織の活性化（育ち）に広がっていく、「育ち」を中心とした活動であることが明らかとなった。それを支えているのが、「ゆるやかなつながり」である。

田中(2006)は、ウィニコットの 「程のよい（good enough）母親」を例に出し、日常生活を支えている「程のよい」とか「自然な」とかで形容できる感覚を説明しているが、今回の「教職ボランティア」体験では、大学と学校、教員と学生、学生と児童との「ゆるやかなつながり」が学生のボランティア体験を支えている。これに関連する理論として、古典的なネットワーク理論に米国の社会学者マーク・S・グラノヴェター（Mark S. Granovetter）が提示した仮説－ 価値ある情報の伝達やイノベーションの伝播においては、家族や親友、同じ職場の仲間のような強いネットワーク（強い紐帯）よりも、ちょっとした知り合いや知人のような弱いネットワーク（弱い紐帯）が重要であるという社会ネットワーク理論－があるが、本研究においては、「ゆるやかなつながり」のなかで、地域の小中学校と大学が継続的に連携を維持し、一方で、学習支援ボランティア活動においても、学生たちに求められることは、各学校のその時々の状況によって異なり、その状況に応じた対応が求められている。さらに、田中は高度にシステム化された今日の組織における「臨床的人間形成」のポイントとして、「異世代間の相互形成のダイナミズム」と「半身のかかわり」について言及しているが、本制度が学校現場の子どもと教員、そして大学生の相互交流を促し、学習支援のためのボランティア活動の担い手（ある意味、中途半端な立場）であることを担保することによって、教職課程の外に「教育的公共性」を生成する仕組みとなっていることが明らかとなった。

また、校長経験をもつ研究協力者や現場の教師から、この制度の意義について、①教職を目指す大学生の教育実習への「恐怖感」を軽減する働きがある。②教育実習では、自らの教育実践をできるだけ明確化していくこと（言語知）が求められるが、ボランティア活動では、実践自体よりも、体感として、その場にともに居合わせて共有した体験そのもの（体験知・暗黙知）が意味をもつ。具体的には、学生が、子どもや教師とボランティア活動を通して一定の距離感をはかり、どのようにかかわればよいかを試行錯誤する等。結果として、その体験を経ている方が、教育実習を成功体験にできるのではないか。

また、本制度に対するボランティア先の教師の思いとしては、「ボランティア・チューターの学生は、教員のアシスタント・補助である」、「教育実習に向けたよい予行練習になる。」と捉えている教師がいる一方で、「学生と一緒に、今回は…のような活動に取り組んでみたい。」、「学生にとっても、どのように児童と接すればよいかなど、今後のキャリア形成においても有効なのではないか。」「「記録すべき観点」をつければ、学生も現場の指導者も、共有認識をもって、記録内容を深めることができると考えます。」という意見が出たが、このような現場の教師から寄せられた意見として、以前から課題として挙げられているのが、「本制度を教育実習同様、教職課程科目外ではあるが、大学の必修／選択科目として、科目化・単位化したらどうか」、「ボランティアに参加する学生が増えるのではないか」や「学生のモチベーションアップにつながるのではないか」ということである。

この意見に対して、本研究の成果から、「単位化」に対しては否定的な結論に至った。単位化に否定的な根拠としては、「ボランティアの原則（自発性・無償性・公益性）」から外れ、ボランティアであることの価値や意味が失われてしまうこと。さらに、自らの教師になるという目的のために、他者（子ども）を対象化・主題化するという意識を高めてしまうことが、「教えられる存在」から「教える存在になる」という自己意識の芽生えや自己変容を妨げてしまう恐れがあることを指摘した。

（２）「ポートフォリオ」（＝ボランティア体験の育ちを分かちもつ記録）から

今回のボランティア体験の省察（リフレクション）の方法としての「記録」を導入することによって、現場の教師（実践者集団）が、学習支援ボランティア活動を行っている学生が、ボランティア体験を通してどのような気づきをしたかを知ることにつながり、互いの体験として共有する場を提供することにつながった。

本ボランティア・チューター制度は、教員養成課程の目的（質の高い教員を養成する）やその基準に準ずるものではなく、１）「教師になりたい」という思いを支え、２）教えることの体験の広がりや深まりを実感する仕組みとして意義があることが明らかとなった。

さらに、本研究の中間発表の段階で明らかとなった課題として、学生のボランティア体験をどのように評価するかというアセスメントの観点の課題が挙げられた。そこで、改めて、アセスメントの観点を検討し、【場面性】と【学びのプロセス】に着目した分析を行った。その結果、明らかとなった教職ボランティア活動の意義は、１）教職ボランティア活動における「育ち」とは、学校現場でのボランティア活動における役割や責任が、増大すること。２）ボランティアに参加した学生が、子ども・教師・管理職（校長・副校長・教頭）と共通言説（＝共有される言葉）を獲得していくことであることが明らかとなった。

本研究の今後の発展的展開として、本研究の枠組みをもとに、他の学習支援ボランティア活動に関する調査を実施するとともに、教員養成における大学と地域との連携の在り方について、さらなる検討が必要であると考えている。

［主な参考文献］
・植田嘉好子『ボランティア教育の現象学 他者支援を教えるとは何か』文芸社、2011 年.
・コルトハーヘン、武田信子監訳『教師教育学　理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社、2010 年.
・鯨岡峻『関係発達論の構築―間主観的アプローチによる』ミネルヴァ書房、1999 年.
・鯨岡峻『エピソード記述入門』東京大学出版会、2005 年.
・佐藤義之『レヴィナスの倫理』勁草書房、2000 年.
・ジャン=フランソワ・レイ著、合田正人他訳『レヴィナスと政治哲学―人間の尺度』法政大学出版局、2006 年.
・皇紀夫他編著『人間と教育』を語り直す-教育研究へのいざない』ミネルヴァ書房、2012 年.
・田中毎実『臨床的人間形成論へ　ライフサイクルと相互形成』勁草書房、
2003 年.
・姫野完治『学び続ける教師の養成　成長間の変容とライフヒストリー』大阪大学出版会、2013 年.
・マーガレット・カー，大宮勇雄他訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房 2103 年.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）
①石﨑達也・鈴木達也
教師をめざす学生の「育ち」を支える大学と地域との連携のあり方に関する考察―教職ボランティア活動の実践活動報告を中心に―
日本教育学会,学校のリアリティと教育改革の課題（b），平成 29 年 8 月 27 日，桜美林大学
②石﨑達也・鈴木達也
「学習支援ボランティア活動」をとおした教員養成モデルの構築について
日本教育学会，教師教育，平成 28 年 8 月 24 日，北海道大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
（アウトリーチ活動）
①平成２６年～２９年度「東京福祉大学 伊勢崎市内関係小・中学校 連携情報交換会」（東京福祉大学）
②「勉強塾ボランティア研究成果発表会」（平成 27 年 12 月 9 日東京福祉大学）

（ホームページ）

６．研究組織
(1)研究代表者
石﨑　達也（TATSUYA ISHIZAKI）
東京福祉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50612818

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：